

「コソガ」の発生とその用法

山 田 昌 裕

はじめに

本稿は、山田（2003）を受けてまとめたものである。名詞述語文の主語表示であった、ある種の「コソ」は17世紀中期以降「ガ」に取って代わられることとなった。その後、「コソ」と「ガ」は用法上の相補分布をなしていたと考えられるが、そのような状況下で「コソ」と「ガ」が承接した「コソガ」という形式はどのようにして発生し発達してきたのであろうか。本稿では、「コソガ」という表現形式の発生とその発達に関して、史的に考察するものである。

1 先行研究

現代日本語において一般的に用いられる、「コソガ」形式（以下、単に「コソガ」とする）の発生過程や用法に関してはまだ解明されていない点が多い。まずは簡単に先行研究に関して触れておく。

山田（1988）では「コソガ」の発生について述べてはいるが、古代語と現代語との比較によるのみで、その詳しい発生過程や用法などについての言及はない。

寺村（1991）では、以下のように、「コソガ」の「コソ」が準体助詞であると述べるにとどまり、「コソガ」の用法に関する記述は見られない。

名詞とガ、あるいは名詞とヲの間、つまり、名詞がガ格、あるいはヲ格であるときに限って、準体助詞に使われることがある。 中略

しかし、このような例は比較的少なく、名詞に直接「コソ」が後接する形のほうがふつうである。(p 93)

中西(1995)では、「コソガ」を「総記のガを更に強調した形であるとしておく」とあるが、「コソガ」は「ガ」を強調する形式なのか、「コソ」を強調する形式なのか、あるいは「ガ」や「コソ」とも違う意味用法を持つ形式なのか、改めて問われなければならないであろう。

丹羽(1997)は、「コソガ」は相手に反論する場合には用いられにくい、それ以外の場合には、「コソ」と大差がないとしている。

「こそ」は主格に用いられる場合「こそが」という形も取る。この両者は等価というわけではない。「こそが」は、次のように相手に反論するときには用いられにくい。

「本当にお疲れさまでした。」「いやいや、君{こそ/?こそが}大変だったでしょう。」

中略　しかし、それ以外の場合は、「こそが」が「こそ」に比べ強調の度合いが少し強く感じられるという程度の違いであり

「コソ」には反論の他に、特立や譲歩などの用法も見られるが(「コソ」の用法に関しては後述)、これらの用法においては「コソガ」と「コソ」との違いは本当は見られないのであろうか。

以上見たように、「コソガ」と「コソ」との用法上の違いに関する言及はあるものの、「コソガ」と「ガ」との関係や、あるいは「コソガ」「コソ」「ガ」の三者間関係などについての言及はなく、特に「コソガ」発生の経緯に関する言及はまだない。

そこで本稿では、まず「コソガ」の発生過程について考察する。これを明らかにすることにより、「コソ」と「ガ」の関係を踏まえた上での「コソガ」の用法とその拡がりについて言及する。

2 「コソガ」の発生過程

本節では「コソガ」がいつ頃から、どのようにして用いられるようになったのか、その発生過程に関して考察する。

2・1 「コソガ」の使用

まずは、「コソガ」の使用例を見てみよう。管見によれば、「コソガ」は明治期以降にならないと文字資料に出現しない⁽¹⁾。以下に明治期に見られる例をあげる（例（1）～（5））。

- （1）余は獄舎の中より春を招きたり、高き天に。遂に余は春の来るを告られたり、鶯に！鉄窓の外に鳴く鶯に！ 中略 思ひ出す……我妻は此世に存るや否？彼れ若し逝きたらんには其化身なり、我愛はなほ同じく獄裡に呻吟ふや？若し然らば此鳥こそが彼れの靈の化身なり。
（北村透谷『楚囚之詩』1889年（明治22年））
- （2）昨日は私が悪るかりし此後はあの様な我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫びられて流石におかしく解けではあられぬ春の氷いや僕こそが結局なり妹といふもの味しらねどあらば斯くまで愛らしきか（樋口一葉『闇桜』1892年（明治25年））
- （3）今のところ、動機となる要素はいくらか平衡を保ち、社会状態もだいたい安定している。しかし、こうしたわずかの平衡も、かりに乱されることがあれば、新たな闘争と苦難の一時期をへてふたたびつかの間の安定が得られるまで、またもや混乱と変化の淵に投げ込まれるであろう。今日の貧しい無力な人びとは、将来の富裕な強者となるかもしれず、その逆もまた同様である。永遠につづく混乱こそが、彼らの宿命なのである。（小泉八雲『日本人の微笑』1893年（明治26年））
- （4）古風な忍耐と献身、昔ながらの礼儀正しさ、古い信仰のもつ深い人間的な詩情 こうしたいろんなものを想い悲しむことであろう。そのとき日本が驚嘆するものは多いだろう。が、後悔もまた多いはずである。おそらく、そのなかでもっとも驚嘆するものは、古い神々の温顔ではなかるうか。その微笑こそが、かつての日本人の微笑にほかならないからである。（小泉八雲『日本人の微笑』1893年（明治26年））
- （5）この脅迫に、果心居士はとまどったような笑いを浮べて叫んだ、「人を

だます罪を犯したのは、わしではない」そして、荒川のほうへ向き、大声で怒鳴った、「お前は嘘つきだ！お前はあの絵を差し上げて殿様にとり入ろうと思った。そして、それを盗みとるため、わしを殺そうとした。もし罪というものがあるなら、それこそが罪ではないか（小泉八雲『果心居士の話』1901年（明治34年））

（1）が明治22年で一番古い例である。「コソガ」の歴史は新しく、発生してからまだ百年程度ということになる。もちろん調査資料による陥穽があり、（1）が書記言語であるということをも勘案すれば、口頭語ではさらに早い時期に発生していると考えられが、後に2・2で述べるように、遡っても19世紀前半と思われる。したがって「コソガ」の歴史は長くとも百数十年であろう。

では、次に「コソガ」成立のための条件を考えよう。

2・2 「コソ」の変容

日本語において係助詞と格助詞が承接する場合には、「格助詞＋係助詞」という語順にならなければならない。もちろん古代語における「コソ」も格助詞に後接する（例（6）～（8））。

（6）さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな（『源氏物語（1）』p.125）

（7）そこにこそ多くつどへたまふらめ（『源氏物語（1）』p.132）

（8）をかしきことももののははれも人からこそあべけれ（『源氏物語（2）』p.298）

したがって「コソ」と格助詞「ガ」が承接する場合、文法体系として考えるならば、「ガコソ」という承接にならなくてはならない。「コソガ」という承接は成立しないのである。「コソガ」が発生するには「コソ」の変容が必要となる。

金沢（2003）は近世前期から近世後期かけての「こそ」の変容を詳細に分析し、次のように述べている。

日本語史的な面から見た、近世語の「こそ」の最大のポイントは、「係助詞」から「とりたて助詞（本稿では、以下便宜上、副助詞とする）」的なものへと、その性格や役割に大きな変化が見られることであろう。

「こそ」は近世期を通して、係助詞から副助詞へとその性格を変えたわけである。近藤（2000）では、副助詞と格助詞との承接に関して、「副助詞の特徴として、名詞＋副助詞＋格助詞 という承接と、名詞＋格助詞＋副助詞 という承接のどちらも持つことがあげられる」（p.208）と述べる。つまり、「ガ」と並存していた係助詞「こそ」が副助詞に変容することによって、初めて「こそガ」という承接が発生しうる状況になったわけである。

すると、「こそガ」は文献上では1889年（明治22年）が初出であるが、その発生は可能性として「こそ」が副助詞化する19世紀前半まで遡ることになる。

2・3 「こそガ」発生の因子

前節では、「こそ」の変容を確認した。「こそガ」という承接が生じるためには、この「こそ」の変容、つまり副助詞化が必須条件なのであった。

しかし、「こそ」の変容は、「こそガ」の成立には必須条件であっても、「こそガ」を発生させた直接の因子とは考えられない。「こそ」の変容という条件のもと、「こそ」と「ガ」とを承接させようとする要求がなければ「こそガ」は成立し得ないであろう。では、一体その力とは何であろうか。

ここで、他の副助詞と「ガ」との承接関係を見てみたい。近世期にはすでに「バカリガ」「ノミガ」「ダケガ」「マデガ」などの「副助詞＋ガ」という形式が見られる（例（9）～（12））。

（9）與兵衛めばかりが子ではない。兄の太兵衛娘なれどもおかちは此方の子でないか（『女殺油地獄』p.416）

（10）さはあれ後の夫にあはねば、只是のみが後やすし（『椿説弓張月』）

p 364)

- (11) 三スジ黒ヤキ以上十味等分ニ合煎シ用ユ。三すじだけが、大わらひなり (『洒落本 青楼昼之世界錦之裏』 p 430)
- (12) 客もうちへかへつても、御持佛の阿弥陀さままでが、女郎の顔に見ゆるもの也 (『洒落本 傾城買四十八手』 p 414)

しかし、そもそも古代語では主格名詞に副助詞が下接する場合には、「ガ」が表出することはなかった(例(13)～(15))。現代語的な主格助詞「ガ」が古代語においては、いまだ成立していないからである。

- (13) さるべき女房どもばかりとまりて、「親の家にこの夜さりなん渡りぬる」と答へはべり (『源氏物語(1)』 p.151)
- (14) 事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを (『源氏物語(1)』 p 96)
- (15) 装束より始めてさるべき物どもこまかに、誦経などせさせたまふ。経仏の飾までおろかならず (『源氏物語(1)』 p 265)

つまり、(9)～(12)のような例は、日本語史的に見ると新しい用法なのである⁽²⁾。これらの例は、単に副助詞を主格名詞に下接させるだけでは言語表現者にとって何か物足りないものがあって、そこに何らかの表現効果を加えようとした結果、「ガ」を表出させたのではないかと推測される例である。「副助詞+ガ」という形式は言語使用者にとっては、何か目新しい新鮮な表現であったのだろう。

「コソガ」も(9)～(12)などと同様の「副助詞+ガ」という形式であるが、副助詞として変貌した「コソ」に「ガ」を承接した「コソガ」は、やはり表現効果として何か目新しい感覚を伴う表現形式であっただろう。言語使用者がそういう表現形式を模索し、要求したために「コソガ」が発生したものと考えたい⁽³⁾。

3 「コソガ」の用法と変容

では次に、「コソガ」の用法について考えてみよう。「コソガ」は「コソ」を強調しているのであろうか、「ガ」を強調しているのであろうか、それとも「コソ」とも「ガ」とも違った一面を持つのであろうか。

(1)～(5)の例を見てみると、全て名詞述語文の主語表示となっていることは注目に値するであろう⁽⁴⁾。「コソガ」は「コソ」と「ガ」との承接からできており、「コソガ」の用法を知る上で、名詞述語文における「コソ」と「ガ」の活動を見ておく必要がある。

3・1 名詞述語文における「コソ」と「ガ」

3・1・1 主語表示の推移

名詞述語文の主語表示の推移に関しては山田(2003)で述べた。それによれば、16世紀以降名詞述語文における「コソ」は次第に「ガ」に侵食され、17世紀中頃には「ガ」が「コソ」を凌駕することになる。(16)は「もうこれで終わりである、これが最後である」という状態を示す類似表現であるが、名詞述語文において「コソ」から「ガ」へと移行したことを示すものである。

(16)「命こそ限りよ」(『曾我物語』p 81)

「命こそかぎりなれ」(『曾我物語』p 355)

「今こそ最後の際なれ」(『曾我物語』p 348)

「是こそ限りなれ」(『御伽草子』p .156)

「これが限りの言葉也」(『御伽草子』p 352)

「それが最後」(『天草版平家物語』p24)

「只今が最後なり」(『仮名草子』p 81)

ただし、「コソ」は現代においても名詞述語文の主語表示として使用されているわけであるから、名詞述語文において「ガ」が「コソ」の領域をすべて侵したわけではない。したがって、名詞述語文において「コソ」と「ガ」

は相補的に並存していたと考えられる。

では、次に「コソ」と「ガ」がどのような用法で相補的であったのかを見ておきたい。

3・1・2 「コソ」と「ガ」の相補分布

野田(2003)によれば、現代語の「コソ」には、特立、譲歩、反論の3用法があるという(例(17)～(19))。

- (17) みんなも悪いが、あの人こそ一番悪い。(特立)
- (18) 程度の差こそあれ、みんなが悪い。(譲歩)
- (19) 「みんなが悪いんだ」「そういうおまえこそ悪い」(反論)

寺村(1991)は、特立の「XコソP」の表現機能について以下のように述べている。

よりふさわしいものからそうでないものまで序列的に捉え、そのなかの最高位にあるもの、「よりふさわしいもの」としてXを取り立てていう言いかたである点に特徴がある。(p 97)

これを受けて森野(2002a, b)は、古代語の「コソ」には、現代語に認めにくい特立の「コソ」があると述べ、それは「他の何でもない」「他の誰でもない」「他の何よりも」「他の何にもまして」と言った表現主体の把握を示すという(例(20)～(22))。そしてこのような「コソ」は近世前期におおよそ姿を消したという。

- (20) 梶原申けるは、「けふの先陣をば景時にたび候へ」。判官「義經がなくばこそ」。「まさなう候。殿は大將軍にてこそまし候へ」。判官「おもひもよらず。鎌倉殿こそ大將軍よ。義經は奉行をうけ給たる身なれば、たゞ殿原とおなじ事ぞ」との給へば(『平家物語 下』p 328)
- (21) 虎は、里の翁にあひて、とひけるは、「すぎにし夏の比、鎌倉殿の御狩の時、親の敵打て、おなじくうたれし曾我的人々の跡やしらせたまひ

候。おしへさせ給へ」といひければ 中略 翁，ある方を爪ざして，「あれこそ，出の屋形の跡にて候へ。あの辺こそ，工藤左衛門殿うたれさせ給ひ候所にて候へ。また，かしこは，十郎殿のうたれさせ給ひ候所，こゝは，五郎殿御生害の所，切また，あれに見え候松の下こそ，二人の死骸をかくしまいらせたる所候よ」と，ねんごろにおしへければ（『曾我物語』 p 408）

- (22) 黄香は，安陵といふ所の人也。九歳の時母に後れ，父に能仕へて，力を盡せり。されば夏の極めて暑き折には，枕や座を扇ひですゞしめて，又冬の至つて寒き時には，衾のつめたきことを悲しんで，わが身をもつて温めて與へたり。かやうに孝行なるとて太守劉曄といひし人，札を立て，彼が孝行をほめたる程に，それよりして人みな黄香こそ孝行第一の人なりと知りたるとなり（『御伽草子』 p 253）

(20)の「鎌倉殿」，(21)の「あれ」「あの辺」「松の下」，(22)の「黄香」，これらの主語は，「よりふさわしいものからそうでないものまで序列的に捉え，そのなかの最高位にあるもの」ではない。つまり現代語の「こそ」にはない用法なのである。このような古典語特有の特立を現代語の特立と区別するため，本稿では強調と呼ぶことにしたい。

では，近世前期に姿を消した強調の「こそ」はどうなったか。それを引き継いだのが「ガ」なのである。実際に，(20)～(22)の「こそ」を「ガ」に入れ替えた方が，現代語的には自然な表現となろう。先にも述べたように，名詞述語文の主語表示では17世紀中頃には「ガ」が「こそ」を侵食した。古代語の「こそ」には強調，特立，譲歩，反論の用法があり，現代語の「こそ」には特立，譲歩，反論の用法がある。ということは名詞述語文において「ガ」が侵食した「こそ」の領域は「こそ」の強調用法の領域であったと考えられるのである。つまり「こそ」が特立，譲歩，反論で，「ガ」が強調という用法上の相補分布が成立したわけである。

3・2 「こそガ」の用法

では、本節で具体的に「コソガ」が「コソ」の強調であるのか、「ガ」の強調であるのかについて考えてみよう。(1)～(5)の「コソガ」の代りに「コソ」や「ガ」を用いるとすると、いずれがふさわしいのであろうか。

(1)の「此鳥こそが彼れの靈の化身なり」は、文脈上「彼れ(妻)の靈の化身」にいくつか候補があって、その中から「此鳥」が一番ふさわしいと取り立てられているわけではない。したがって、もし「此鳥こそ彼れの靈の化身なり」のように「コソ」に置き換えると不自然であり、「此鳥が彼れの靈の化身なり」のように「ガ」の方が自然である。つまりここでの「コソガ」は「ガ」をさらに強調する形式として用いられていると考えられるのである。(3)の「永遠につづく混乱こそが、彼らの宿命なのである」も、「彼らの宿命」にいくつか該当するものがあるが、その中からふさわしいものとして「永遠につづく混乱」を選択しているわけではない。したがって「コソ」を用いるよりも「永遠につづく混乱が彼らの宿命なのである」の方が適当である。やはり「コソガ」は「ガ」を強調していると考えられるのである。

一方、(2)の「いや僕こそが結局なり」は、相手に先に謝られた状況を受けているので、「コソガ」と入れ替えるとすれば、「ガ」よりも反論の用法を持つ「コソ」の方がふさわしい。この場合には、「いや僕が結局なり」では不自然で、「いや僕こそ結局なり」の方が文脈としては自然であろう。つまりこの場合の「コソガ」は「コソ」を強調している形式であると考えられるのである。

(4)の「その微笑こそが、かつての日本人の微笑にほかならない」は、「～にほかならない」とあることから、「その微笑」が、該当する候補の中からふさわしいものとして選択されたものとして解釈できる。この点で特立用法として「コソ」に置き換えることが可能である。しかし、この場合は文脈上「ガ」でも不自然ではない。つまり、(4)の「コソガ」は「コソ」を強調しているとも「ガ」を強調しているとも捉えることができる例である。また、(5)の「それこそが罪ではないか」も、「人をだます罪を犯したのは、わしではない」を受けて発言しているので、反論の用法として「コソ」に置き換えることも可能であるし、「他にもないそれ」という意味で「ガ」を用

いることもできる例である。(5)の「コソガ」も「コソ」の強調とも「ガ」の強調とも捉えることができる。

以上見たように、「コソガ」は、「ガ」を強調しているとしか捉えられない場合や、「コソ」を強調しているとしか捉えられない場合もあるが、「コソ」「ガ」いずれを強調しているのか判断ができない場合にも使用されているわけである。つまり、「コソガ」は単純に「コソ」と「ガ」とを承接させた形式であり、しかし、それゆえ「コソ」や「ガ」が使用可能なところに強調として用いることができる便利な表現形式であると考えられるのである。

また先に見たように、「コソガ」の発生は、「副助詞+ガ」という新しい表現形式に則って起こったと考えられるため、「コソ」と「ガ」との間にある用法上の相補分布には影響を及ぼさなかったものと思われる。なぜなら、その相補分布は現代日本語においても残存しているからである。

明治期以降に見られる文字資料においても、「コソガ」の使用傾向は変わらない。(23)は「コソ」に置き換えると不自然であり、したがって「ガ」を強調する例、(24)は「ガ」に置き換えると不自然であり、「コソ」を強調する例とみなせる。(25)(26)は「コソ」「ガ」いずれを強調しているのか判断できない例である。

(23) まして、わが作家同盟が、その成員と活動の歴史性により過渡的制約性として、現在まだ少なからず小市民性的要素を包括している場合、その小市民性こそが困難な闘争に際して「左」右両翼への偏向を生む社会的要因である場合、われわれの警戒と努力とは、相互的な関係において常に結ばれている。(宮本百合子「前進のために 決議によせて」『プロレタリア文学』(日本プロレタリア作家同盟機関誌) 1933年(昭和8年))

(24) だが、考へやうによつては、おきよが苛々してゐるのももつともだと云ふ気がしないではなかつた、どうせ、飲み屋のことだから、そこで働く女の一人一人が俺が俺こそが客を持つてゐるとの自惚がなくてはかなはないとだけではない、おきよにはおきよの古い思ひ出があつた

はずだ（武田麟太郎『一の酉』1935年（昭和10年））

- (25) 七兵衛の奴は、稼ぎさえすればいいので、稼ぎためなんぞは存外、頭に置いていない男だから、自分が稼ぐことの興味と、労力とのほぼどの程度であるかということ、相手に納得させてやりさえすれば、その粕に過ぎないところの稼ぎためなんぞは、思ったより淡泊に投げだしてしまうに違いない。ところが、二人のうち、特にお絹という女にとっては、その粕こそが珍重物である。（中里介山『大菩薩峠 勿来の巻』1931年（昭和6年））
- (26) さて、私の如く常に芝居の空気とその雰囲気による訓練を欠いている無風流な者どもが、そして毎日無風流な文化住宅とビルディングとアトリエの中をズボンと靴で立ちつくしているものたちが、時たま観劇に誘われて見ると、東京の劇場は靴のままの出入りだから幸福だが、大阪では通人のする苦労を共に楽しまねばならない。この我まんこそが芝居をよりよきものにするのだとは知りながらも、つい腹の方が先きへ立ってくるのでいけない。（小出楯重『めでたき風景』1930年（昭和5年））

3・3 「コソガ」の拡がり 述語の多様化

「コソガ」の使用は当初、名詞述語文（例（1）～（5）（23）（25））において見られたが、動詞述語文（例（24）（28））や形容詞述語文（例（27））、「ノダ文」（例（26）（29））などにおいても見られるようになってくる⁽⁵⁾。

- (27) 「戦争と革命との新たなる周期」において、文化運動の内部に発生したこのような敵に対して、仮借なき闘争こそが必要である。同志小林は、この課題に率先して立ち向い、次々に、逞しき諸論策を送った。（宮本百合子「同志小林の業績の評価に寄せて 誤れる評価との闘争を通じて」『プロレタリア文化』日本プロレタリア文化連盟機関誌、1933年（昭和8年））

- (28) 時評とは一定の限られた時事問題に即して、原則的な立言をすべきものだといっているのであって、山川氏のようなやり方の論文こそが、実は時評というものの全般のやり方とならなければならぬというのである。(戸坂潤『思想と風俗』1936年(昭和11年))
- (29) 私はこう思います。当時の歴史の若さ、全体として経験の未熟さこそが、貴方の云われる「あんな男」を、一応は指導者めいた位置にもおいたのであろうし、同時に、文学についての理解においても、その若さ未熟さから避け難い文化主義を生んだのであったろう、と。(宮本百合子「不必要な誠実論 島木氏への答」『読売新聞』1937年(昭和12年)6月9日号)

このように、「コソガ」は多様な述語文において見られるようになってくる。このことは「コソガ」の汎用性を示唆し、活動領域が拡大してきたことを意味するであろう。こうして現代日本語において「コソガ」は定着を見たのである⁽⁶⁾。

4 まとめ

本稿では、「コソガ」の発生と用法について考察した。まとめると以下の通りである。

- a 「コソ」の副助詞化が近世後期に見られた。この変化は「コソガ」発生の必須条件である
- b 「副助詞+ガ」という承接の表現形式群が近世期にすでに存在し、それにならって副助詞化した「コソ」を用いた「コソガ」が発生したと思われる。
- c 「コソガ」は、「コソ」を強調することもでき、「ガ」を強調することもできる。したがって、「コソ」や「ガ」が使用可能なところにおいて自由にもちいることができる点が特徴的であると考えられる(但し、この特徴は成立時に限るものと思われる)。

注

(1) 調査した資料および本文に引用したテキストは以下の通りである。

【奈良期から江戸期】

『岩波古典文学大系』(国文学研究資料館の日本古典文学本文データベースのテキストを参照させていただいた。),『源氏物語』(日本古典文学全集),『天草版平家物語対照本文及び総索引』(明治書院),『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇(上中下)』(表現社),『狂言記の研究(上・下)』『続狂言記の研究』(以上,勉誠社),近世文学総索引編纂委員会編『近松門左衛門』『井原西鶴』(教育社)

【明治期以降】

CD-ROM

『新潮文庫 明治の文豪』『新潮文庫 大正の文豪』『新潮文庫の絶版100冊』『新潮文庫の100冊』(以上,新潮社)

『太陽コーパス』(博文館新社),『国定読本用語総覧』(三省堂)

web上の公開電子資料

青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>),明星大学柴田雅生氏のHPで紹介されている電子資料(<http://jcmac5.jc.meisei-u.ac.jp/etext-i.htm>)

(2) 管見によれば,「ばかりが」は早く中世の資料に見える。

名残おしさに,いでゝみれば,山中に,笠のとがりばかりが,ほのかに見え候(閑吟集 p.164)

(3) 付言すれば,そもそも「ノミ」は以下のように格助詞に後接する助詞であったにもかかわらず,それが格助詞「ガ」と承接する場合には「ノミガ」となっている。「コソ」がそれと同じ道筋を歩んでいることは興味深い。

朝夕の宮仕につけても,人の心をのみ動かし(『源氏物語(1)』 p.93)

今は内裏にのみさぶらひたまふ(『源氏物語(1)』 p.114)

(4) 例(4)の「ほかならない」は形容詞とも考えられるが,「他ではない」

が原義であり、他の例と同じく名詞述語文と捉える。また(3)～(5)は、小泉八雲の例であり、八雲の日本語の習熟度の問題もあるが、八雲よりも以前に「コソガ」の使用が見られるので、これらの例も当時の日本語を反映しているものと考えてよいであろう。

- (5) 実は例(3)も「ノダ文」ではあるが、名詞述語文が「ノダ文」になっているので名詞述語文とした。
- (6) 但し、成立時の「コソガ」と現代の「コソガ」とは、やはり違いがあるように思える。例えば、(1)の「此鳥こそが彼れの靈の化身なり」などは、表現として多少違和感を覚え、現代日本語の表現としては「此鳥が彼れの靈の化身なり」の方が自然であると思われる。

【参考文献】

- 金沢裕之(2003) 「特立のとりたての歴史的変化 近世以降」『日本語のとりたて 現代語と歴史的変化・地理的变化』(くろしお出版)
- 近藤泰弘(2000) 『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)
- 寺村秀夫(1991) 『日本語のシンタクスと意味』(くろしお出版)
- 中西久実子(1995) 「コソとガ 総記的用法」『日本語類義表現の文法(上) 単語編』(くろしお出版)
- 丹羽哲也(1997) 「現代語「こそ」と「が」「は」」『日本語文法体系と方法』(ひつじ書房)
- 野田尚史(2003) 「現代語の特立のとりたて」『日本語のとりたて 現代語と歴史的変化・地理的变化』(くろしお出版)
- 森野 崇(2003a) 「係助詞「こそ」の機能とその変容の要因に関する考察」『国語学 研究と資料』25
- (2003b) 「特立 を行う「こそ」の変容をめぐる」『早稲田日本語研究』10
- 山田昌裕(2003) 「名詞述語文「AガBダ」型の発生とその拡大の様相 主格表示「ガ」と係助詞「ゾ」「コソ」との関連性

」『国語学』54 - 2

山田みどり(1988)「「それこそが期待される」語法の誕生」『同朋大学論
叢』58